

思い込みの冒険

R. H. デイヴィス S. Tajima 訳 ver1.0 © 2020

【一】

僕は夏休みが来たら何か冒険をしてやろうと思っていた。いつも何か面白い事が起こらないかなと期待していたのだけど、去年の十月で二十五歳になったと言うのに、大した話になる前に冒険の方が僕を避けてしまおうみたいだ。キニーは、僕が本気を出さないからだと言うんだけどね。

キニーはジョイス・カーボイスというウールを作っている会社で、事務員をやっていて、僕の隣の机に座っている。僕はと言うと速記が仕事なんだ。二人ともショーさんの家に下宿している。彼は僕よりも一つ年上で、しょっちゅう冒険をしているらしい。

僕は、将来は裁判所の書記になれたらと思っていて、その為には法律を知らないから夜遅くまで勉強していると、僕の部屋にはいつてきて、また冒険をして来たなんて言うんだ。

時には消防車を追いかけて、火事場で人助けをしたとか、警官の持っている防護シールドを取り上げてきたとか、ニッカーボッカーホテルのバーで有名人と一杯飲んだとか、まあこんな話だね。

それに女の人だよ。特に美人。いつもキニーの事を追いかけてくるらしく、荷物をタクシーから下ろすのを手伝うんだって。しかし、キニーが、いかに人助けを嗅ぎつける才能があるとしても、見かけはとても頼りになれそうな奴じゃないね。

困った女の人なら、もっとデカくて強そうなのを探るか、警官に頼むよね。しかし、女の人、特に美人はいつもキニーに頼るんだって。

こんな事、僕には起こったためしがない。キニーが言うのは、どうも彼が生まれも育ちもニューヨークで、都会人なのに、僕は一年前まではフェアポートという田舎の海沿いの村にいたせいらしい。フェアポートは本当に綺麗

な港だけどね、ま、冒険は無いところだろうね。

僕たちは、夏休みを同じ時期に取ることにし、どこかへ出かけようということになったんだ。少なくともキニーはそう決めてしまった。

だからしょっちゅう僕の部屋にやってくるんだけど、夏休みの楽しみといったら、会社もこの下宿の部屋も見なくていい事位に思っていた。

キニーと一緒に遊びに行こうと言いだしたときには、どうやったら気を悪くさせずに断ろうかと悩んだんだ。でも、冒険をしたいというなら、僕くらいの適任なガイドはいないぜと言われると、これは確かにそうだなと思ったのだよ。

「時々ね、」と彼は言う。

「どうも君は僕が言う半分も、本当に起こったなんて信じていないんだろう？ そうだろ？」

どうしたら、気を悪くしないような返事ができるか考えていたが、返事なんか待ちやしないで言った。大体、人の返事なんか待つ奴じゃないんだ。

「今回の旅行ではね、キニーの実力を実感するよ。僕の言葉を信ずるとかのレベルじゃないからね。冒険が向こうからやってくるよ」

僕たちの夏休みは九月の一日からなんだが、四月から計画し始め、ニューヨークから出かける前夜まであれやこれやと続いた。

僕はニューヨークの北のサウンドという処にあるフェアポート育ちなので、ちよつとホームシック気味で、塩のにおいや水辺、それに船が見たかった。船といたってセメントを運ぶスクーナなんだが、陽を浴びながら、波止場のボートを止めておくロープにでも寄りかかって見ていたいと思ったのだ。

小さなヨットで港の周りをうろつきながら舵の手応えを感じるのは悪くないだろう。しかし、キニーはそんなことをしていったって冒険にはならんし、夏休みにもならんと言った。フェアポート行きには大反対という顔をしていたな。

潮干狩りなんて嫌だねと言い、さらにフェアポートでの冒険なんて、せいぜいヨットがひっくり返るか、ロブスターの罾でも盗み出す位のもんだと付け加えた。

彼は、僕たちは山へ登って、『著名人』と知り合いになるべきだと言って譲らない。九月とは、皆、海岸べりの滅入る空気から逃れて山に行き、リフレッシュする時だと言うわけだ。

僕はショーさんの下宿の食堂でも地下鉄でも、海岸べりの空気なんてどうせ吸い込む心配は無いと反論したのだがね。

こういう議論を六、七、八月の熱くて眠れない夜、延々とつづけた。

ニューヨークから五百マイル以内のリゾート地はすべて調べた。キニーはニューヨークから出ているすべての鉄道会社の旅行案内やインフォメーションカウンターから、時刻表、地図、案内書、パンフレットの類を集めて来た。すごくきれいなホテル、ゴルフコース、テニスコートそれにボートの絵などが満載されている。

二ヶ月の間、かれはこれらのホテルに問い合わせ、スイートルームや日光浴のための設備とその値段を比較し楽しんでた。

『アウトルックホテル』の居間と風呂付き寝室は一日二十四ドルだと言う。「一方『カートレットアームズ』の方は、同じ格の部屋が二十ドルだ、でもテニスコートが付いてないんだよな。もっともアウトルックの方は車庫が無くて、犬を寝室には入れられないけどね」

キニーはテニスは出来ないし、僕たちどちらも車を持っていないければ犬も飼っていない。ついでに二十四ドルもないので、そんなことは知ってもしょうがないと言おうとも思ったが、キニーの気分を損ねたくもない。

というのは、彼の自慢だが、想像力については大したもの、もし持っていないのなら、「持っていると思ひ込む」、するとその気になって、世の中楽しくなるそうだ。

キニーは服装をすごく気にする男なので、夏休みに何を着るか悩んでいた。僕がそんなに心配するなと言うと、

「君は気にする必要がないのさ」とおかんむりだった。

「もし僕がヨットに乗って育ち、きれいに日焼けしていて、ブロードウェイで目立つ金髪でもしていたら、僕だって気にしないさ。ショーさんが、『君はイギリス貴族が変装したみたいなルックスだ』と言ってたぜ」と言った。

僕はイギリス貴族には、本物も変装したのにも会ったことがないが、ふうんと思ったことは認める。

「この下宿の女の子たちがさあ、」キニーは声を高めていった。

「いつもマッチを借りるのになんで君の部屋にいくと思っているの？ 服装が気に入っているからかね？ それなら俺のところに来る筈だぜ」

「君は、夜はいつも出掛けているだろう」と僕は言った。

「理由は分かっているくせに」キニーは文句をつづける。

「どうしても事務所のタイプピストの女の子たちが、鉛筆削りに君のところに行くんだよ。それに少しばかり

難しい言葉の綴りを聞くためにもさ。食堂の女の子だって、いつも先に用意するのは君だぜ。あの子たち、君の服装に惑わされているとでも言うのかい？」

「気が付かなかったけどね、僕は」

キニーは、天を仰いで鼻を鳴らし、

「気が付かなかった、気が付かなかっただ！と繰り返した。

キニーは夏休みに持っていく中古のスーツケースを買い込んだ。フランスとかスイスのホテルのラベルがぺたぺた張ってあるのをね。

「ねえジョー、それ持って歩くのは詐欺師みたいなもんだぜ。」

キニーのフルネームは ジョセフ・フォーブス・キニーなのだけど、ジョセフという名前は使わないことにしている。彼にいわせると、ジョセフというのは有名人には殆どなくて、旧約聖書に出て来るくらいのものだそう。そこで、僕はフォーブスと呼ぶことになっている。

でも最初に、「ジョー」の名前で憶えてしまったので、忘れるんだな、これが。

「僕の名前はジョーでは無い、」とのたもって、さらに「僕には中古のかばんも、新品も同じように持つていく権利がある。ヨーロッパに行ったことがあるというのはかばんであって、僕が行ったことがあると言っている訳では無いよ、君」と続けた。

「でも君は、きつと行った事があると言いつすよ。そうすると、本当に行った誰かさんがさあ……」

「俺のいう事をきけよ、」とこんどは命令調で、

「冒険をしたいんだろ。それには何でもいいから、重要人物じゃ無いとダメなんだよ。週給二十ドルの事務員のジョー・キニー、人間計算機兼雑用係といっしょに冒険しようなんて奴はいないんだよ。でもね、ヨーロッパを旅していて、ハーバードのリボンを帽子に付けている、フォーブス・キニー氏なら……」

「君の帽子に巻き付けてあるのはハーバードのリボンなのかい？」

「その通り」と宣言した。

「僕はイエールのリボンも、馬術クラブのリボンも持っているんだ。みんなピンで止めるようになっていて、服装とか、付き合う相手に合わせるんだよ。それにね、」とやや興奮ぎみにつづける。

「テニスラケットにゴルフバッグも借りたんだよ、もちろん中身つきさ。だから気を付けて、余計な事をいうなよ」
「なるほどね、そうやって僕たちをトラブルに巻き込むつもりなのか」と僕は言った。

「ちょっと考えていたんだがね、」と僕をやや疑わしそうな眼でみながらキニーが言った。

「最初の週は、君が僕の秘書役をやって、二週目は僕が君の秘書役をやると、きつと面白いことになるよ」

時には、ボスのジョイスさんが出張に行くときに僕もついて行って速記をすることがある。だからオフィスから外に出ると、いい気分転換になることは分かっている。でも、どうして僕がキニーのために夏休みの一週間も手紙を代筆するのは分らない。

「あ、手紙なんか書かなくていいんだよ」と説明を始めた。

「僕が、秘書をつれていると廻りの連中に言えばね、当然箔がつくんだよ」

「いつそのこと、僕はイギリス貴族の変装だと言ったらどうかね」と僕は言った。

「嫌味をいうね。僕はただ、どうしたら冒険に会えるか、君に教えてるのだぜ」

「確かに、」と僕も同感し、

「行き付く先は牢屋だけだね」と言った。

八月の最後の週となって、しかもどこに行くかはきまらない。僕は、とうとう当てずっぽうに決めようと言った。

「まず、とにかくこの酷いところから逃げ出すんだ」と言って、

「次に、出来るだけ安くね。ここから汽車か船で二ドルでいけるリゾートを紙に書いて帽子の中に入れる。

その中から引いた場所目指して、土曜の午後に出発するんだ。」

付け加えて、

「このアイデアだけでも、結構な冒険だぜ」

キニーは合意した、不承不承だけだね。彼の不満はニューヨークからその程度の費用でいけるところなんて、ファッショナブルな筈がないという点だ。

「すごく心配なだけだね、」と彼は言う。

「君のような想像力だと、僕たち、明日の朝はアズベリー公園あたりだよ」

金曜日の夜がきて、旅行準備を始め、十二時ころになって、くじをひくことになった。枕カバーの中に、行く先を書いた二十枚の紙きれを入れた。十枚はキニーのお薦め、十枚は僕が決めた所だ。

キニーはもつともらしく腕をまくりあげ、くじ袋の中に手をつ突っ込むと、一枚つまみ出し、そして読み上げた。

『ニューベッドフォード、ニューベッドフォード汽船経由』

これは僕が書いた場所だ。

「ニューベッドフォードかよ」と、最高にがっかりした声で叫んだ。

「工場街じゃないか」と続け

「紡績工場しかないよ」と結論を下した。

「そうかも知れないけどね、」と僕は反論する。

「でも、古くてすごく景色のいい港だよ。アメリカでも一番古い港のはずだ。港には捕鯨船もあるし、船の舳先にくつつける木で出来た像とか、銚^{もり}とか、見るものは沢山……」

「僕たちは埋もれた町の発掘に行くの？」と僕をさえぎり

「遊びにいくんだぜ。銚なんてどうでもいい。僕は突き刺されても、銚だって分かんよ。女の子の帽子ピンなら歓迎だけどね」

汽船のペイシャンスは夕方六時に出航する。でも、さっさとニューヨークから離れたかったので五時には船に乗っていた。

僕たちの船室は二段ベッド付きの安い部屋だ。スーツケースを船室に放り込むと、キャンプチェアを持って来て船のデッキの涼しいところに陣取った。

キニーは夕刊をすべて買い込んできて、アイヴィー伯爵がこの国に到着したというニュースを熱心に読んでいた。こんな細かい事を覚えている理由があるのだけど、それは後で。

新聞は最近あの若いアイルランド人と、ここで結婚することになっているフィアンセに、必要以上のスペースを割いていた。

彼の、方々の国にある邸や彼の絵が新聞に出ていた。制服を着たものの、なんかの儀式の時のローブ姿、馬に乗ってポロをしているところ、キツネ狩りの先頭に立っているところなどだ。

それにミス・オールドリツチの絵、彼女の生まれた国の、ニューポートとかハドソン川沿いの邸宅の絵などだ。キニーが得た情報では、あの若いアイルランド人は、ミーハンという家名を使って、妹のレイディー・モリー¹と

一緒に今朝ニューヨークに上陸、しかしジャーナリスト連中に見つかる前に、波止場から姿を消して、行方不明だという。

キニーは勿体つけて読み上げた。

¹ 『レイディー』はイギリス貴族の娘の称号。

『方々のホテルに問い合わせたが、アイヴィー卿とレイディ・モーヤの行方は特定できず、汽車でただちにニューポートに向かったと推測される』

大西洋航路の汽船モータニアの赤い煙突を指しながら、キニーは言った。

「あれに乗ってアメリカに来たんだ」といい、続けて、

「新聞にゴルフをしている絵があるけど、このニットの上着はアイゼルバウムで三ドル七十五セントで売り始めたんだ。知っていたらなあ……」とがっかりしたように言った。

「ニューベッドフォードでも新しいのが買えるよ」

「僕のいうのはね、ニューポートに行くべきだったという事さ。この国の有名人は結婚式を見るのに、みんな集まっているぜ。今季最高の社会的イベントだからね。アイルランドと同盟を結ぶくらいの騒ぎだよ」

僕は船の前の方で荷物を積み込むのを見ていた。キニーは旅客通路の上の手すりのところに陣取って、他の客が乗り込むのを見ていた。

彼は、とりわけ服装に気を付け、今はイエールの帽子飾りをつけていた。しかし、スマートな若者がハーバードのリボンをつけて、船に乗って来るのを見て、慌てて船室に行き、ハーバードリボンに付け替えてきた。

数分後にはキニーと若い男はキャンプチェアに座って、話をしていた。と言っても話すのは殆どキニーだったけどね。

実際、その男はキニーが言っている事など聞いちゃいなくて、下の乗船用タラップを見ていた。そして彼と同じ位の若い男と、粗いツイードをきた女の連れが現れると、椅子から飛び起きたけれど、キニーを気にしてまた座った。ツイードを着た女の子は誰でも椅子から立ち上がる位の美人だった。

しかし僕には、今まで見たことのない、とんでもない美人だと思われた。灰色の目と、すばらしい金髪で僕が始めてみる髪型、しかもその顔つきの可愛らしさを見て、我ながら驚いたが、喉がつかえ、驚異と喜びで心臓が止まってしまった。

本物の方のハーバードリボンの若い男は椅子から立ち上がり、キニーにちょっと頷き下に降りていった。

僕も彼に続いて降りて行った。どうしてもあの金髪の女の子を見たくて、我慢ができなかったのだ。別に、彼女に無理やり会おうというつもりじゃない。そんな失礼なことはしたことがない。でも、それほど僕に妙な行動をとらせる人には会ったことがなかった。

彼女をさがしてサロンを行ったり来たりしたが見つからない。こうしている内に、自分のしていることが無礼な

ことだと気付いた。

あまりにも美人だというのが、彼女自身を保護している。彼女を付け回して、覗こうなどというのは言い訳できる行為ではない。こういう思いに至り、僕は急いで上のデッキに戻り本を読み始めた。ページを見たからって、あの子が気にならなく訳ではもちろん無いが、少なくとも見つめたりして迷惑がられることはない。

僕は、例の若い男があげた椅子に座ろうとすると、キニーが文句を言った。

「彼は、僕たちの話にすぐ乗って来てね、きつと戻って来るよ」

僕は若い男がキニーと話すのも、聞くのにも興味がないのは気付いていたが、腰を下ろすのは止めた。

「僕はねえ、あの若いやつは、きつと名士だと思う。ハーバード出身で、最高のマナーだぜ。ああいうマナーを見るのが、本物の名士を見分けるコツだよ。見下したり、偉ぶったりしないんだ。何しろ地位がしっかりしているから、鷹揚なんだよ。例えばね、彼がパイプを吸うのを見たかい？」

僕は気が付かなかったと言った。

夏休み用に、キニーは普段なら買えないような高級葉巻を一箱用意していた。その時、その葉巻を吸っていたが、短くなるにつれ、注意深く金色のバンドを火のついた端からずらしていた。でも話している内に、ケチ臭いことに気付き、海の中に放り込んでしまった。

「僕の椅子を取っておいてよ。船室へもどってパイプを取ってくる」と言って立ち上がった。

僕は椅子に座り込んで、本を見つめたけれど何かを読むどころか、活字さえ見えなかった。その代わりに、僕の目の前に、混乱させ盲目にさせる様に、あの可愛い、輝くような女の人の顔があった。困惑しながら見上げると、ほんの二フィート程のところにあの子が立っているのだ。何か僕を椅子から引っぱり上げ、ちよつと彼女に近寄せた。僕は帽子を持ち上げ、引き下がろうとしたが、あの子の可愛い目が僕を停めた。

僕はちよつと困ったが、彼女は軽い驚きと喜びの混ざった表情をしていた。彼女が僕を知り合いとまちがえたか、あるいは、知り合いに似ていんだと思う。後の場合だとすると、その男が彼女の友達なのは、僕に見せた表情でわかる。それに、ちよつとした嬉しい驚きという表情があった。僕が急いで積を譲ろうとしたからかも知れない。その子は僕を見たまま、高いビルを指さした。

「あのビルは何というか教えていただけませんか？」と言った。

質問だけでは証明にならないが、その子の声が、外国人かつアイルランド人であるのをはつきりと示していた。柔らかくて、低く、響くような声である。

月並みな質問なのに、彼女が言うと、歌を聴いている様だった。僕はビルの名前を教え、もっと先の方、川の真ん中の方まで行くと見えて来るけれど、もっと高いビルがあると話した。彼女は、気さくに、興味を持ったように聞いた。でも、僕はその子の前で困ってしまい、邪魔をしているのではと怖れ、立ち去ろうとした。すると、他のことを訊いたので僕はまた立ち止まった。理由は分からないが僕と話したかったのかも知れない。

「あれは変な船ですねえ。川の中に水を入れているの？」と言った。

僕は、あれは消防艇でホースの試験中だと説明、船が水路に出る頃には勇気が戻ってきた。そして、自由の女神像、ガバナーズ島とブルックリン橋の解説を続けた。

見ず知らずの男が話しているのに、全く気にしていない風だった。そしてどうやって彼女がそういう考えを僕に伝えたか分からないが、彼女がどんなに突飛なことをしようとも、廻りの連中が彼女を失礼だと思ったり、誤解をしたりしないというのを彼女は知っていた。

僕は、あの子に自分の名前を言おうかと思った。最初、その方が丁寧だろうと思ったのだが、押しつけがましいと思い直した。単なるニューヨーク港のことをちよつと知りたいだけかもしれないね。ブルックリンの海軍基地を過ぎるとき、停泊している軍艦のことをすぐ熱心に話したので、その女の人は僕が海の仕事をしていると思つたに違いない。

「水兵さんをしてらっしゃるの？」と彼女は言った。

始めて僕個人について訊かれたのだ。

「ヨットにはよく乗りましたが」と僕は言った。

僕の答えが良く分からなかったようだったが、新発見をした様に楽しそうに笑い始めた。

『『水兵』って言わないのですね』と言い、

「こちらでは海軍に勤務している人のことを何というのですか？」と、あたかも僕たちが異なった言葉を話している様に言った。

「海軍に勤務していると言いますね」と僕は言った。

彼女はまた笑って、何か僕が気の利いたことを言っただけだと言った。

「じゃ、あなたは違うのですね？」

「ええ、僕はジョイス・カーボイスに勤めています。速記が仕事なんです」

どうも僕はまた彼女を困らせ、驚かせたみたいだ。疑わしいように僕を見た。思うに、彼女は僕が、理由不明

だが、ミスリードしていると考えていた。

「事務所で働いているのですか？」

そして、ようやく僕を捕まえたという感じで、言った。

「でもすごくいい体格をしていらっしやいますよね。」

男が訊くような、極めて直接的な言い方で、この時僕の骨格や肩幅などを見極め、体重を測っているように感じた。

「事務所で働き始めたのは最近なんです。その前は、屋外での仕事をずっとして、牡蠣や二枚貝の漁、秋はホタテ貝ですね。それに夏はホテルのチームで野球をしたんです」

この美人には、僕の説明が全く意味不明なのに気付いたが、細かい話をする前に、一緒に船に乗り込んだ若い男がこちらに向かって歩いてきた。

彼もまた、あの子が知らない男と話しているのに困惑している様子は無かった。彼は立ち止まり微笑んだ。彼の微笑みは、人を気持ち良くさせるものの、曖昧だった。ちょっとした間彼といるだけで、楽しいのを押し隠した微笑みではなく、単にそういう顔付なのが分かった。写真を撮る時に言うだろう、「チーズ」って。そういう時の微笑みなんだ。

彼が僕たちのところに来た時、その女性に敬意を表して、ちよつと帽子を持ち上げたのだけど、その若い男は表面的な敬意など意に介さないようで、手をポケットに突っ込んだままだった。煙草も吸ったままだ。

彼がその子に言った最初の言葉には驚かされてしまった。

「君の部屋には真鍮製のベッドがあるかい？」と彼は訊き、その可愛い娘はあとと答えた。

「僕の部屋のもそうだ。中々サービスがいいよね。ほんの三ドルだしね。それっていくらなんだろうな」と若者は言った。

「四掛ける三だから十二。十二シリング」彼女は言った。

若い男は煙草を琥珀の長いパイプで吸っていた。そんなに長いのは見た事が無い。パイプの先をちよつと見て、そこに煙草が刺さっているのに驚き、安心し、満足という風に微笑んだ。

可愛い子はマディソンスクエアに生えている大理石の柱を指さして言った。

「あれがニューヨーク一高いビルなのよ」これは僕が教えたばかりのことだ。

その若者は、ビルに紹介でもされたかの様に微笑み、でも興味はなさそうだった。

「あ、そう」と彼は言った。この調子は、あの子が「兎ですよ」と言っても全く同じだったろう。

「いまに、」と、最初と同じ位に突然言い出した。

「我が国の軍艦は、将来、あの高いビルの屋根を吹き飛ばすだろうね」

何もここでこんな事を言わなくてもいいだろう。全く不必要だ。この可愛い女性を前にした若者のマナーの悪さに憤慨してしまった。礼儀知らずに思えた。彼女の知り合いなんだろうけど、敬意が全くない。僕と来たら全くの他人なのに、こんなにも可愛い子が、期待通りなのですから嬉しくなり、本当、ひざまず跪きたいほどだった。だから一言言ってやったのさ。

「もし、お国の軍艦がお国のヨットよりもインパクトが無い様でしたら、アメリカなどに遠征せず国に置いたままの方がいいですよ。石炭の節約にもなりますからね」

僕は普段、そんなに長いスピーチをしないし、そんな無礼な啖呵をきくこともないのだけど、言ってしまったから彼女のために後悔した。

しかし、一息おいて、彼女は楽しそうに笑い出した。

「分かったわ。」ゲームをしている様に叫んだ。

「リプトンの事なのよ。²アメリカスカップで勝てなかったの。だから軍艦にビルの屋根が吹き飛ばせる訳が無いのよ。分からないのスタンプス！」

僕が無礼なことを言ったのにこの若いスタンプスと呼ばれた男は微笑み続けた。それから、少しの間不快で陰気な顔つきになったが、晴れ晴れとした笑い顔になって、

「なるほど」と叫び、

「うまいねえ。『お国の軍艦がインパクトが無いなら…』全く。これはいい。」と言って、僕が自分のスピーチの好さに気付かないのを心配している様だった。

「君にはかなわん」と弁解する様に言い、さらに「本当、これはいい」と言った。

突然、反対の方向からキニーと本物の帽子飾りをつけた若者が現れた。スタンプスも、連れも困ったという顔つきをした。スタンプスは、助けてくれという顔で金髪の女の子を見た。聞こえるくらいな呻き声をあげ、さぼっているのが見つかった学生みたいだった。

「何てこった。もうピリピリしなくなつていいだろうに。出発したらデッキに出てもいいと言ったじゃないか」とスタンプスは言った。

² トマス・リプトンは紅茶で成功した実業家。ヨットを持ち、アメリカ杯に1899年から1930の間に5回挑戦。

彼女は僕のほうを向いて、やさしく可愛い微笑みで頷いた。そしてスタンプスを連れてその若い男の方に行った。彼らが来るのをみると若い男は立ち止まり、一緒になると熱心に、殆ど怒ったように話し始めた。そして驚いたことに僕をにらみつけたのだ。それと同時にキニーが僕の腕をつかんだ。

「下に降りろ」と命令したのだ。荒っぽくてスリルに興奮していた。

「僕たちの冒険がはじまったんだよ」とささやいた。

【三】

僕にとっては、冒険はもうとづくに始まっていて、あの美人と出会ったのは僕の一生の出来事だった。キニーと僕は冒険を共有する約束だったけど、このことについては話しもしなかった。

一人になり、楽しみに耽ろう、あの子は何を言ったか思い出し、また僕が何を言ったかもだ。これを人に話す気は無い。僕にとって、あまりにも素晴らしく、神聖なんだ。でもキニーを放り出すわけにもいかず、彼について船室に入ると、彼はドアにカギを下ろした。

「ごめん、」と話し始め、

「でもこの冒険については君に話すことができない」

彼のいう事は僕が思っていたことと全く同じだったので、キニーもあの美人に参ってしまったのかと、急に心配になった。でもすぐに心配はなくなった。

「ちよつとした、探り事をしていたんだ」と言った。声は低くて陰気だった。

「本当の冒険にぶち当たったんだ。今は君に話せない理由があるんだが、もう少し進んだら訳が分かるよ。

三十分程まえだけだね、ここにパイプを取りに来たんだ。窓は開いていて、格子窓も一部だけしか閉まっていない。外には例の、僕と知り合いになったがっているハーバードの男と、あのブロンドと一緒に乗ってきたイギリス人がいたんだ」ここでキニーは自分で、話を止めた。

「君が今話していたあのブロンドだよ」と言った。

僕は彼があの子の女性を『あのブロンド』と片付けるのに我慢できないし、大体あの子の事自体話題にして欲しくない。そこで、黙らせようと思って

「彼女はシンガービルの事を僕に訊いたんだ」とそっけなく答えた。

「あっそうなの。それはどうでもいいんだけど、あの男達二人が僕の窓の外側にいてね、僕がパイプを探して

いると、あのアメリカ人が言ったんだ。怒って興奮していてね、『ね、分かっている、鉄道の駅もボートの波止場も見張られているんだぜ。ニューヨークから出るまでは安全じゃないんだ。自分の船室に戻って、そこにじっとしているんだ』。するともう一人が『もう隠れたり、逃げ回ったりするのは飽き飽きだ』と言ったんだ」

ここでキニーは、ドラマの様に沈黙し、難しい顔をした。

「それで、それがどうしたの？」と僕は訊いた。

「どうしたかだと！」人を憐れむ、いらいらした声で叫んだんだ。

「これだから冒険に出会わないわけだよ。決まってるじゃない、あいつらは犯罪者で逃亡中なんだよ。イギリス人が逃げ隠れしているのは確かだよ」と叫んだ。

僕はあの可愛い子だけを気にしていたのだけど、一応訊いてみた。

「あのスタンプスというアイルランド人の事かい？」

「スタンプスだと！ 妙な名前だと思わないかい。嘘に決まっている。偽名だよ！」とキニーは宣言した。

僕は、怒ったね。キニーがあの可愛い子の友達を犯罪者扱いするんだから。他の人なら本当に腹を立てたろう。でも、キニーに腹を立てるのは難しいんだよ。何しろ彼は自分の想像に取りつかれた奴隷みたいで、僕はいやと言う程良く分かっているんだ。

想像力は彼に取りつき、彼をどこに連れて行くかわからないんだ。だから、無実な人たちも犯罪者になってしまおうし、地下鉄で彼が席を譲った女たちも彼にかかれば、偉人で社会的リーダー、これからスラムに行って人助けの途中という事になる。

「ジョー、」と僕は抗議した。

「あの連中は犯罪者なんかじゃないぜ。僕はあのアイルランド人と話したけど、犯罪が出来る程頭がよくないよ」「鉄道は監視されている」とキニーは言って、

「正直な連中なら、鉄道が監視されているなんてこと気にすると思うかね。君は気にするかね。僕が気にするだけでも言うんか。それにスタンプスと君が話していたのに気付いて、あのアメリカ人がどのくらい怒ったか分かっているの？」

実は気付いていた。それにスタンプスがあの可愛い子に言った『彼は出帆したら、デッキに出てもいいと言ったじゃない』と言うのも覚えている。

これらの言動は、キニーが聴いてしまったという情報を、裏付けるように見える。しかし、彼を焚きつけると大

変なので、僕は黙っていた。

「彼は単に呼び出しを避けようとしているのかも」

「彼は証人として呼ばれているだけかも。民事裁判のね。あるいは、彼の運転手が誰かにぶつけてしまったのかも知れない」という可能性を話して見た。

キニーは悲しそうに頭を振った。

「失礼かもしれないがね、君は想像力が足りない。彼らは悪人だよ。それも危険な連中で、あの女は共犯者なのだよ。彼らが何を犯したか僕は知らない。でも僕はもう彼らを不審人物として逮捕するに十分な情報を持っているのだ。」

ねえ、聞いてくれ。かれらは、船の前の方に銘々、特等室を持っている。あのアメリカ人の窓は開いていてスーツケースもベッドの上にあった。それにはイニシャルのH.P.A.が書いてある。彼の特等室は二十四号室だ。そこで僕はパーサーの乗客リストを見たんだ。僕の知り合いが乗っているかどうか知りたいからと言ってね。

二十四号室の男はジェイムズ・プレストンという名前だ。つまりだ、どうして彼らの一人は偽名を使い、もう一人は出航するまで姿を現したくないというのかね」と問題を出し、僕が答える前に続けた。

「僕はこのH.P.A.氏、つまりプレストンと話をしたんだよ」と言い、

「ま、ちょっと重要な人物に見せかけてね。金持ちの振りをしたのさ。僕の目的は、」と急いで付け加えて

「彼に僕を引っ掛けさせる事だからね。証拠を握るためにね。その為僕は…」とちょっと困惑して、

「君も金持ちで要人の部類だという事にしたんだ」

僕はあの可愛い人のことを思い、恥ずかしくて赤くなってしまった。

「何てことをするんだ!」と思わず叫んだ。

「そんな権利があるのかい? 僕たち二人ともすごく不快な状況に巻き込まれるよ」

「君は何にも巻き込まれていないよ」とキニーは文句を言って、

「ベッドフォードにつき次第、上陸してホテルで僕を待っているだけでいいよ。この連中の始末をつけたら、ホテルに行くから」

「始末をつけるだど!」僕は驚いた。「どうするつもりなのかね」

「逮捕するのさ! 波止場に着き次第すぐに」とキニーは、厳しく言い放った。

「駄目だよ!」と僕は思わず息を飲んでいった。

「もう手配済みだよ」とキニーは答えた。

「つまり逮捕同然という訳さ。ニューベッドフォードの警察署長に連絡したんだ」と勝ち誇ったように言った。
「波止場で僕に合流さ。電報を使ったんだ。これがその中身だよ」

ポケットの中から紙を取り出すと、大きな声で読み始めた。

『汽船ペイシャンズ到着次第、波止場で待たれたし。ニューヨークより逃走の、名の知られた犯罪者二人乗船。彼らの告発用意あり。――フォーブス・キニー』

僕は驚きから回復するとすぐに、強烈に抗議を始めた。キニーに、このような行為は言語道断であること、その程度の証拠で、深刻な告発をするのは、懲罰の対象になること等だ。彼は全く平気だった。

「つまり、君は、彼らに対する検察側の証人にはならんという意味かい」と、偉そうにいった。

「僕はこんなことに一切巻き込まれたくないね。あの若い女性を困らせる権利なんて全く無いよ。警察に、間違えた電報を打つべきだね」と僕は叫んだ。

「あの女を逮捕する気はない」とキニーはぎこちなく行った。

「僕の電報には彼女のことは書いていない。もし君が自分の冒険をお望みなら、僕が彼女の共犯者を逮捕している間に、逃げるのを助けたらいいだろう」

「あの若い人に向かって、共犯者なんて言葉を使うのは許せない。それに、彼らが本当に犯罪者だったとして、逮捕したら、君に何の得があるんだよ」、僕は喚^{わめ}いた。

キニーの目は、ここで輝いたんだな。

「新聞のことを考えて見ろよ。全面この話でいっぱいだぜ」とキニーは言った。
もう見出しを想像しているんだ。

『賢明な一網打尽』彼は見出しを読み上げる。

『ニューヨーク市警から逃走中の犯罪者、フォーブス・キニー氏により捕縛さる』。ここで、満足した溜息をついて、

「僕の絵も印刷されると思うよ」と付け加えた。

もちろん僕は怒るべきだと思っていたが、実のところ彼が可哀そうになってしまった。キニーとは一年程の付き合いだが、彼の『こうなったつもり』はいつも悪意はないのだ。彼はいわゆる俗物だと思うけれど、彼に関しては

俗物性も不快な欠点ではないのだ。

彼の場合、彼に欠けているものを持つ人物を見ると、自分より優れているものと思ひ込んでしまう。その結果、知る価値が生じ、知り合いになろうとする。しかし、彼がほかの人に優っているとは思えない。彼の人生には中身が無く生きている世界も狭い。その結果、多くの物に偽の価値を見てしまう。例えば、アマチュア探偵であっても新聞に載りたいのだ。だから僕は、怒っていたが、可哀そうにも感じたのだ。

「ジョー、とんでもないトラブルになるよ。僕は関係無いけれど、必要な時は僕は助けるって知っているよね」と僕は言った。

彼は、サンキューといって僕たちは、食堂に行った。あの可愛い女性、スタンプスとアメリカ人は僕たちのテーブルの近くにいた。彼女は僕に微笑みかけたけど、この時は何となく疑わしく見えた。

しかし、アメリカ人は、疑いなどもっていなかった。彼は僕とキニーを睨み付け、煮立った油の中に放り込もうとするかの様である。

食事後、キニーは僕の反対を押し切って、アメリカ人に話しをしに行った。『しっぽを出させてやる』とか言うても、しっぽを出すのはキニーの方だと心配しながら、遠くから見ていた。

一時間後僕が一人していると、船員がやってきて、パーサーが僕に面会したいと告げた。僕が彼の事務室に行くと、スタンプスとアメリカ人の友人、船の夜警そしてパーサーがいた。パーサーは、口火を切らせるため、アメリカ人に頷いた。

その人は僕に向かって喧嘩腰で話し始めた。

「私の名前はオールドリッチといいます」彼は言った。

「そこで、あなたの名前は何かというのか聞きたい」

僕は彼の言い方が気に入らなかったし、パーサーのオフィスに呼び出されて知らん男に尋問されるのも気に入らない。

「なぜ？」と訊き返した。

「理由はね、あんたは『いくつも』の名前があるらしいんでね。その内一つは、ここにいる方の名前なのだよ」とスタンプスを指しながらオールドリッチが言った。

「彼は、何故あんたが、彼の名前を使っているか知りたいのだよ」

僕がスタンプスを見ると、いつもの習慣であの曖昧な、しかし愛想のいい微笑を浮かべたがオールドリッチの顔を見て、しかめっ面をした。

「私は、自分の名前以外つかったことなど無い」と言い、

「それにもしそうするにしても『スタンプス』なんて名前は選ばんね」と楽しそうに付け加えた。オルドリッチは、あっけに取られた。

「彼の名前スタンプスなどでは無い！ 彼は、アイヴィー伯爵だ」と憤然として言った。

彼は僕が驚くと思っていたようだ。そして、僕は驚いたのだよ。僕は、新聞ですっかり有名になったこの若いアイランド人を見つめた。この男が彼なのか。

オルドリッチは僕が黙っているのを誤解した。そして勝ち誇ったように、極めて不快な調子で続けた。

「これで分かったろう、アイヴィーの振りをするつもりなら、他の船に乗るべきだったな、君！」

事態はあまりにも馬鹿馬鹿しく、怒る気にならなかった。そこで僕は自分を無理やり落ち着けながら訊いた。

「一体どうして僕がアイヴィー卿の振りをしなければなんのかね」

「それは、すぐに調べ出すつもりだ」とオルドリッチは僕を遮り、

「とにかく、君の今夜の企みは阻止した。明日は警察だからな。君の友人がね、この船中君がアイヴィー卿だと触れ回ったんだよ。あいつ自身についても嘘でかためて、自分が偽物だと証明してしまったのさ」とあざけるように言った。

やっと僕にはなにが起こったか分かった。そしてもし、僕がキニーの助けになるとすれば、本当はこの拳を使いたかったんだが、代わりに頭を使うことにした。僕は、まったく気にしていないように笑い出し、パーサーの方を向いた。

「ああ、そういう話しか！」と言って、

「またキニーがやったんだ。彼はいつも僕を引っ掛けるんですよ」

そして、オルドリッチに向き直り、

「彼は貴方にも冗談をしかけたのですね。誰かも知らないで。貴方がかなりのイギリスびいきだと見て、からかったんですよ」

「なんだと、」とオルドリッチは叫んでポケットから紙を取り出すと、震えながら叫んだ。

「これが、ニューベッドフォード警察にいま打った電報だよ」

彼は、満足した様で大声で、脅迫するように読み上げた。

『詐欺師二人、本船にあり。未来の義兄であるアイヴィー卿、そして彼の秘書を騙^{かた}る。アイヴィー卿本人も乗船。

警官を派遣されたし。訴追予定。ヘンリー・フィリップ・オルドリッチ』

僕はこの時おもった。こんなとんでもない電報を二通も受け取り、朝六時に波止場まで出向くなんてなると、警察署長は手当たり次第誰でも逮捕する気分だろう。そして逮捕されるのはキニーと僕に決まっている。

馬鹿馬鹿しいけれども、大恥を搔くことになるのは確かだ。

僕はアイヴィー卿に言った。

「これはすべて誤解から起こったんです。キニーを呼んで下さい。そうすればすべてご説明いたしますよ」

アイヴィー卿はひどく退屈していたが、とにかく微笑んで、頷いた。しかしオルドリッチは冷笑を浮かべていった。

「キニー君は、特別待遇されているよ。船室係が窓とドアのところに立ってね。明日警察に話すんだな」

僕は腹をたててパーサーに言った。

「あんたはキニーさんを囚人として監禁しているのか？」

「もしそれでただですむと思うなら……」

「部屋に居なくても構わんですよ」とパーサーはぶすつとして、

「船室係が見張っているのに気付いて、自分で閉じこもったんですからな」

「僕はすぐに彼に会いに行く。俺のあとを付けてく来たら海に放り込むぞ」

誰も僕を止めようとはしなかった。どうせ逃げ出せないし、僕と一緒にいたら危ないとおもったのだろう。

キニーは二段ベッドの端に腰を下ろしていて、力のない呻き声で僕を迎えた。全く悲惨な表情というほかはない。

僕に怒らないで欲しいと懇願する様に両手を挙げた。

「一体全体どうやって、」と彼は始めた。

「あの小さい、赤毛のエビみたいな奴がアイヴィー卿だと、俺にわかるんだ！ それにあの背の高いブロンド

女が、」と憤慨しながら続けた。

「あの共犯が、妹のレイディ・モーヤだってわかるんだ」

「何があったの？」と僕は訊いた。

キニーは帽子をかぶっていたが、それを脱ぐと床に叩きつけた。

「この帽子のせいだ。ハーバードリボンのせいだ。船員だけがつける事になっているなんて、俺が知るか！

オルドリッチが不思議な顔でみているのに気付いたんだ。『君はこの船のスタッフなんだね』と訊くから、意味を

推理して『ああ、去年乗ったんだ』と言ったんだ。運がわるいことに、彼も去年、この船に乗っていたんだ。

これで疑われてしまって、夕食のあと話に言っただろう、あの時は拷問だったよ。きっと僕の答えがまずかったんだろう。突然立ち上がった、僕のことを詐欺師だと叫んだんだ。僕は、あいつが悪党で僕は探偵、すでに、ニューベッドフォードに電報が打ってあって、逮捕させるつもりだといった。

彼は、僕に探偵だと言う証拠を見せろと言っただけで、もちろん証拠なんて示せない訳さ。そこで船員を二人呼んで、パーサーに話しに言ってる間、僕を見張らせたんだ。監視されているなんて嫌だから、この部屋に戻って来たんだ」

「どうして僕がアイヴィー卿だなんて彼に言ったの？」

キニーは頭を掻きむしって、はじめに呻いた。

「あれは船が出る前だった。冗談だったんだよ。彼が話に乗って来ないので、アイヴィー卿の友人だと言って、話をちよつと面白くしようと思ったんだ。君はそんなルックスだし、ショーさんが、君はイギリス貴族みたいに見えると言ったのを思い出してね。だから、あそこにいるのがアイヴィー卿で、僕は彼の秘書だと言ったんだ。そしたら急に興味を持ちだしてね、」とキニーは言った。

「しゃべりすぎたんだ。本当にすまない」と情けなさそうに続け、

「君をひどい目にあわせることになってしまった」といったとたん、目を輝かせ、

「僕たち、ここから逃げてしまえばいいんだ」と小声で言った。

僕も同じことを考えてみた。しかしそれは馬鹿なアイデアだし、現実的ではなかった。逃げ出すのはとても無理で明日の朝にはとんでもなく不快で不名誉な経験が待っていると思った。

新聞はアイヴィー卿に関するものなら何でも記事にする。今度は僕がとんでもない見出しを想像する番だ。フェアポートの両親や昔の友達はどう思うだろう。でももっと切実なのはジョイス・カーボイの対応だ。詐欺師として逮捕されてしまったら、裁判所の書記だの、判事になりたいとかいう夢はどうなる？

でも、もっとも僕が情けなく思ったのは、あの美人が僕のことを下らないチンピラか間抜けだと思うことだった。まったく、絶望という言葉は、この時の僕のためにあった。キニーを放っておけるなら、僕は海に飛び込んで岸まで泳ぎつける。その夜は暖かだったし霧も深い。岸までの距離なんて言うのは、アヒルみたいに育ってきた僕にとっては単に、水に濡れる以上のものではない。でもキニーを置き去りにはできない。

「君は泳げるかい？」と僕は訊いた。

「泳げるもんか」と憂鬱に言って、

「それにスーツケースには名前が書いてある。持って行けないから、じきに僕たちの名前なんぞバレてしまうよ」
「もしボートが使えればなあ。この船に用意されているあれさ！ 皆が寝静まったところで、あいつを下ろせばスーツケースも一緒に持っていけるぜ」と力を込めて言った。

この船に装備されている一番小さいボートは二十五人乗りである。もし、船員全員を起こさずに下ろせるくらいなら船をハイジャックする方が簡単だと僕は指摘した。

「いちいち反論するなよ！」とキニーは不機嫌に言ったが、急速に元気をとりもどしつつあった。危機が彼を鼓舞した様だ。

「考えろ！ ニューベッドフォードに着く前にこの船から逃げ出す方法を考えるんだ。何かある筈だ。逮捕されてたまるか。そんな事させて…」興奮して、自分で自分の言葉を遮った。

「分かった！」と低いしゃがれた声でいった。

「火災警報を鳴らす。船員はみな持ち場に着く。救命ボートが下ろされる。一艘に乗り込んでどさくさに紛れて…」彼の空想の中のどさくさで次にながら起こるかは、僕には知ることができなかった。

実際に起こったことと言うのは、あまりにも混乱していて、確かなものが全くない。

ロングアイランドに沿って航行している時、舷側に大人しく寄せていた波の中から人の恐怖の叫び声が最初に聞こえた。次には足音、呪う声と悲鳴だ。さらに猛烈なショックで僕たちは投げ出され、押しつぶし、引き裂く音が聞こえた。燃えている屋根が落ちてきて地下室まで押しつぶしていく時というのはこうかもしれない。

つぎの瞬間には、僕たちの窓に船のマストが突っ込んできた。ドアをこじ開ける隙間が残っているだけだった。まだ投げ出されているキニーをひつつかんで、通路に出た。彼はやつとのことで立ち上がり、頭に手をやると、

「俺の帽子はどこだ？」と叫んだ。

僕は、下部デッキに水が流れ込み、貨物や荷物入れを洗い流す音を聞いた。馬が人間の様に悲鳴を上げ、多くの人間が動物のように悲鳴を上げ泣き叫んでいた。僕が気を取り戻した時に最初に考えたのはあの可愛い女の子のことだった。僕はキニーの腕をつかんで揺さぶった。あまりの混乱で、彼に訊くには大声で叫ばねばならなかった。

「アイヴィー卿の船室はどこだ？ 妹の隣だと言ったろう。案内しろよ」と僕は叫んだ。

キニーは頷くと、階段を駆け下り、三つの船室に面した通路へと進んだ。ドアには隙間が出来ていて、僕が三つとも覗くと誰もいないし、ベッドも使った形跡が無い。

僕は彼女がまだデッキにいと気づいた。探し出さねばと思い、デッキへの階段を昇った。

「女と子供が先だ」とキニーは叫んでいた。

「女と子供が先だ」

僕たちがサロンの傾いた床に降りていってもまだキニーは機械的に繰り返していた。その時、電灯が消えた。オイルランプの明かり以外船は真っ暗となった。多くの客はもう寝込んでいた。彼らは思い思いの奇妙なスタイルで船室から飛び出てきた。手に手に救命胴衣、ハンドバッグそして衣類をつかんでいる。ある男はスポンジをつかみ、別の男は傘を持っていた。この男は逃げ道をふさいでいる連中を傘で殴っていた。女の人の頭を殴ったので、僕はこいつを殴り倒してやった。膝をついたまま、聞こえる声で神に祈り始めた。

僕たちが上甲板に出ると、通路に押しつぶされたものをかき分け、船尾の旗竿につかまりながら進んだ。船は左舷に向けて大分傾いていた。船の手すり越しに、船員がボートを下ろしていた。ボートの周りには気が狂ったような連中がつかみ合いをしている。僕たちの右舷側には、スクーナのマストがおおい被さっていた。このスクーナが僕たちの船の舷側に、突っ込んだのだ。スクーナの舳先にはボートが通れるくらいの穴が開いて、海水が流れ込み、スクーナを沈めていく。

スクーナはもう船尾から沈み始めていた。揺れるランタンの光で、三人の船員がデッキから小型のヨットを下ろしているのが見えた。その中にオールと帆を放り込むと、とも綱を下り始めていたがスクーナがよろけるとパニックになったのだろう、船首に向けて走り出し、僕たちの船の下デッキに飛び移った。その小型ヨットは見捨てられ、僕たちのペイシャンズとスクーナの間で揺れていた。キニーは僕が見た物を見つけると、僕の腕を引っ張って、

「あれだ。あれで逃げよう」と小声で言った。

僕は、あのヨットが、三人目が楽に乗せられると見積もった。そして三人目が誰かもう僕は決めていた。

「待ってて、」と僕はいった。

ペイシャンズには多くの移民が乗っていた。この日の午後、エリス島³から出て来た連中だ。彼らは用意が整う前に救命ボートに殺到していた。船員が漕ぎ出すとこの可哀そうな連中は、理解できず、自分達が他の客を救うために犠牲にされると思っていた。

彼らは自分や、女房、子供の命を懸けて闘っていた。僕はこのつかみ合いの中から、引き倒され、踏みつぶされたような女を二人ひっぱりだした。でもどちらも僕が探していた人ではない。薄闇の中で、頭にハンカチを巻いた

³ かつてアメリカの移民局が置かれていて、移民はすべてここを通過してアメリカに入国した。

移民の女の子が救命具を必死に着けようとしているのが見えた。機関員がそれをひったくると、手すりの方へ走っていった。僕がそれを取りもどそうとすると抵抗しながら言った。

「もう、自分勝手にやるしかないんだ」

「そうかよ！」と僕は怒り、興奮して言った。

「自分の面倒をみな！」と顎を殴ると、それを離して落ちていった。

僕は、すぐそばで低い、興奮した笑いを聞いたと思ったら、続けてその声が言った。

「お見事！ 事務所で習った筈はありませんよね」

振り返ると、あの可愛い女の子がいた。僕は救命着を移民の子に放り投げると、レイディ・モーヤを子供の時から知っている様に、手を引っ張ってデッキを下りた。

「僕と一緒に来て」と命令した。僕は震えていたが、今までのなんとなくの心配と遠慮は無くなっていた。僕は掴んでいた彼女の手を握りしめた。

「よかった！ 僕は、逃がしたかと思った」

「逃がした？」と繰り返したがレイディ・モーヤはそれ以上何も言わなかった。

「私の兄を探さないと」と彼女は言った。

「一緒に来て」と命令し、

「キニーさんと下のデッキへ下りて。僕はあのボートを船尾に持っていくからそれに飛び乗るんだ」

「兄を置いていく訳には行かないわ」レイディ・モーヤは言った。

そう言った途端に、デッキで発生した人間渦巻きの中から、大砲の玉のようにスタンプスが飛び出した。彼の妹が安心して小声で叫ぶと、スタンプスはバランスを取り直し、濡れた犬がやるように身体全体を震わせた。

「あの中から生きて出られるとは思わなかったよ」とちよつと得意そうに言った。暗いから僕には見えなかったが、いつもの様に笑っていたのに違いはない。

「サッカールの夜より酷い。マフェキング攻城戦よりもだ」

彼の妹がヨットを指さしていった。

「この方があのボートをここに持ってきて、私たちはそれで避難しますからね。手遅れになる前にいきましょう」

「了解！」とスタンプスは楽しそうに言った。

「フィルはどうする。わたしのすぐ後ろにいたんだけどね」

すると、ほんの数ヤード先のところから、不機嫌な声が混乱を通して聞こえた。

「おい君たち、アイヴィー卿を探せ。もしアイヴィー卿が…」

強く、乱暴なアメリカ訛りの声が答えた。

「アイヴィー卿なんか糞くらえ！」

レイディ・モーヤはくすくす笑った。

「下のデッキに行つて！ ヨットをを取つて来るから」とぼくは命令した。

僕が手すりを跨ぐとアイヴィー卿が言つてるのが聞こえた。

「フィルを見つけて来るから」

僕は下のデッキに飛び降り、手すりにぶら下がると、膝で身体を突き出して水の中に落ちた。ほんの二かきほどヨットに着くと、乗り込み、スクーナから離すと蒸気船の方へ漕いでいった。船尾の下に着けると、下デッキからキニーが偉そうに声を高めて

「女性が先です！ いや、姫君と言わねばなりませんかね」と言っていた。沈みゆく船から逃げると言うのにキニーはマナーを忘れることができないのだ。しかしオルドリッチ氏は明らかにマナーどころではなかった。

彼が叫んでいるのが聞こえた。

「俺はこんな船には乗らんぞ！」

レイディ・モーヤが笑いながら言った。

「でも、そうしないと溺れますわよ」

黒い影が手すりの上に蔽い被さると、

「ちよつと、下の人、ゆらさない様にしてね」

と彼女の声が出て、次の瞬間にはまるでリスのように軽々とボートの中に飛び降り僕の腕の中に納まった。オルドリッチがまた怒って声を上げた。

「溺れる方がましだ」

アイヴィー卿は、ちよつとびっくりする反応を示した。

「それなら、溺れたら。水は暖かいし、快適に死ねるよ」

と言つてアイヴィー卿は、僕の足元に落っこちてきた。

「キニー、気を付けて降りろ。ボートを浸水させないでくれ。」と僕は叫んだ。

「大丈夫、気をつけるよ」

次の瞬間、僕の肩にぶつかり、僕はアイヴィー卿の上に彼を放り出してしまった。

「おい、僕の頭からどいてくれ」と卿はおっしゃった。

キニーは皆に酷く謝った。レイディ・モーヤが声を高めた。

「フィル、これが最後よ。来るの、来ないの？」

「そんな詐欺師とは行くもんか。僕は乗らん」と彼は叫んだ。

「君たち二人とも気が狂っている。溺れる方がましだ！」

気まずい沈黙が続いた。僕は難しい立場にいるし、何と云っていいか分からない。だから黙っていたね。

「溺れそうなときは、」レイディ・モーヤが、元気に言った。

「誰と一緒に溺れようとかまわないでしょ」

アイヴィー卿は、妙に爆発的なマナーで突然言った。

「フィル。お前は馬鹿か！」

「ボートを出して」とレイディ・モーヤが命じた。

彼女の言い方から、この命令は僕に対してというよりオルドリッチを気遣って出したのだと思う。それは効果的で、その瞬間に水しぶきが上がった。アイヴィー卿は軽蔑した様に鼻を鳴らしたただけであとは何もしない。

「そうか、溺れたいと言うんだな」と言っただけだ。

オルドリッチは水を吐き、咳をしながら水の上に現れた。そして、僕たちがボートのバランスをとって、何とか這い上がった。

「言っておくけど、抗議に来たのだ。君とスタンプスに抗議するためだ」と息をゼイゼイさせながら言った。

「誰にも義理は無いからな。私は……」

「オールを漕げますか」と僕は訊いた。

「君の仲間に言ったらどうだ。去年、あの船に乗っていたんだろう」と獰猛な様子である。

「フィル！」レイディ・モーヤの声は、僕の想像外の痼癩の兆しがあった。

「オールを持って！ いやなら、歩いて帰って。オール用意！」

彼女は命令した。

「そして丁寧に話す！」

レイディ・モーヤは、船尾に陣取って舵を取った。スタンプスはちじこまっているキニーと共に船首の方に押し込められた。僕はオールのリズムをとりオールドリッチは前のオールを漕いだ。

「コネティカットの海岸を目指しましょう」と言いペイションスの船尾から離れた。

数分の内に全く船は見えなくなり、霧笛のほかは騒ぎも聞こえなくなった。そして僕たちも霧の中で、迷子になった。困惑した、しかし雄弁な沈黙がつづいた。僕はパニックの中で、お互いに踏みつぶしてしまわない限り、あの汽船の客たちの安全は心配無いと思っていた。

僕たちが船を離れる前に、無線機が『スタンバイ命令』を受信しているのを聞いていたし、『フォールリバー・プロビデンス・ジョイ汽船』の大型船、それにブリッジポートからニューポートの間の無線基地すべてからランチが救援に向かっていると考えていた。僕は、救助活動は船の他の客には充分だろうと思っていたが、この可愛い女性には全く不充分だと思っていた。暴徒で一杯のデッキに彼女を置いておく訳には行かない。僕は、彼女の為に、じきに到着する救援を待たなかったのは良かったと思う。

ヨットの上では安全だし、波は静か、コネティカットの海岸も、三マイルと離れていないと判断した。

霧でまごつかなければ、一時間位の内にこの可愛い女性は、陸の上を安全に歩けるはずである。僕は身勝手にも汽船から離れたことを喜んでいた。キニーも僕も警察が歓迎パーティーをしてくれる中に飛び込む必要も無くなった。復讐に燃えたオールドリッチは僕たちの近く、彼の服から滴る水滴の音が聞こえる距離にいるが、とりあえず大人しくしている。僕が、自分の運を祝っていると、彼は僕の立場をぶち壊し始めた。明らかに、彼は自分の立場を考え、キニーと僕をどうするか練り、結論がでたところで攻撃にでたのである。

「私は繰り返しているが、」と突然宣言し始めた。

「私は誰にも恩義を感じていない。私の友人たちが刑務所にいるべき人間を信じてしまったため、ここに一緒にいるだけだ」と喧嘩腰で続けた。

「そして、刑務所に放り込むのが私の義務でもあるので、ここにいます。従って、上陸次第、すみやかに警察に行き、彼らを逮捕させるつもりだ。これを言うておく」

僕たちは霧に包まれお互いが見えなかったもので、彼の言葉は幻想的で実世界のものとは思えなかった。
滴るような沈黙、どこからともなく聞こえるしゃがれた警告音、現在位置が不明となったと誰もが感じている状況では、警察所は取りあえずどうでもいい話だった。誰も、話さなかったし、霧のなかでは言葉も消え、沈んでいくだけであった。でも、彼が話したので、僕は喜んだ。少なくとも警告を聞いたのだとおもった。僕はまだ逃走でき

ていない事、キニーと僕は相変わらず危機の中にいるのだ。僕は、可能なかぎり、このヨットをコネティカットの外れの海岸、警察署どころか、人間の住んでいないところに着けてやろうと決心した。

僕たちがペイシャンスの汽笛がとどかない、あるいは声が届かない距離まで来ると、僕たちの能力が露見してしまった。

レイディ・モーヤは、慣れた操舵手ゴクステンとは言えないし、オルドリッチはレース用ボートはうまいかもしれないが、ヨットは分かっておらず、右側を強く漕ぎ過ぎた。いずれにしても、僕たちは、全く迷子になってしまったのだ。この苦境は僕たちだけではなく、夜通し霧笛や、笛、ベルそしてエンジンの不規則な音が聞こえた。それなのに、その音のする船に呼びかける程の距離にはおらず、その方向に向かって漕いでも皆、やがて静かになってしまった。

二時間すると、キニーとスタンプスが代わって漕ぐといいだし、レイディ・モーヤは舳先に移動した。

僕たちは彼女にコートを渡した。彼女はそれをクッションにして、少し眠ると言った。眠ったかどうか僕は知らないが、彼女は静かにしていた。さらにもう侘しい三時間ほどが経つと、僕たちはまた交代し、ボートの底で眠った。ボートは相変わらずどこへ行くかわからずに漂ったままである。

五時だった。霧は十分晴れ、皆の顔が見え、海面の広がりも見え始めた。時々、通り過ぎる船の霧笛だけが聞こえ、オルドリッチを極限まで苦しめていた。

彼は大声を出して船に呼びかけたしスタンプスとレイディ・モーヤも一緒に叫んだ。僕とキニーはこの皆の叫びにあまり寄与しなかった。『救助される』と言うのは、僕たちが最も避けたことなのだ。ヨットにせよタグボートにせよ、僕たちを乗せてくれる甲板というのは陸地につながっていて、このしつこいオルドリッチに慈悲を願わねばならん訳だ。僕たちはこのヨットと、霧の陰に隠れていたいのだ。

僕たちが黙っているのをオルドリッチは見逃さない。いつのまにか舳先のほうに這って行って、不機嫌にレイディ・モーヤに囁いていた。そして、今は大声で、

「私が言っただろう」と軽蔑するように叫んだ。

「こいつら、このボートで逃げ出したのは、私が恐ろしいからなんだよ。溺れるのが怖いからじゃない。怖くないなら、なぜ一晩中霧の中をうろついているんだね。どうしてあのタグボートでも止めて助けを求めないのかね」
アイヴィー卿が突然爆発した。

「馬鹿！ 君が怖いならなぜ、一緒に来いと頼んだというのか？」

「彼らはわたしに頼んだりしていない！」とオルドリッチは勝ち誇って言った。実際これは本当なのだ。

「彼らは、君とモーヤを誘拐したんだよ。君たちを言いくるめるためにね。でも私は不要だったのだよ」この言い方は状況をうまく言い表していて、僕はこれ以上黙っている訳には行かなかった。

「僕たちは、もう、あんたなんか要らない。分からないのか！」と僕は可能ながぎり自制しながら言った。

「僕たちは誠心誠意、アイヴィー卿に説明したいんだよ。君にもそうしようとしてるんだ。でも警察は避けたい。僕の友達は君とアイヴィー卿は逃走中の犯罪者だと思ったんだよ。君たちは僕たち二人が犯罪者だと思った。君たちも……」

オルドリッチは軽蔑した様に鼻を鳴らして、

「聞いた風な事を言うな。警察に言いたくない筈だよ」と叫んだ。

舳先から声がして、レイディ・モーヤが立ち上がった。

「フィル、もう飽き飽きしました」と言い、ボートの腰掛を跨いでキニーが座ってオールを握っている処まで来て、

「私は良く兄とボートを漕ぎました。代わりましょう」と言った。

彼女が座ると、僕たちの距離はすぐ近くになり、僕と眼があった。オールを漕ぐ時にはかがみ込み微笑した。

「それでは、話を聞きましょう」と命じた。

僕が話し始める前に、彼女のうしろから突然後光がさした。カーテンを引いた様に、霧が晴れ、太陽が滴るように、紅色にそして豪華に水面から顔を出した。

皆からは、感嘆と喜びの声が、そしてアイヴィー卿からは高い、信じられないような笑い声が聞こえた。

レイディ・モーヤは楽しそうに手を叩いて僕の後ろを指した。僕が振りむくと、五十フィートも離れていないところに浜の浅瀬と、石の波止場が見え、波止場の上には、ツタの絡まった小屋が見えた。煙突からは煙がゆらゆら昇って。

レイディ・モーヤがオールを漕いでいる時にボートがもし向きを変えず、太陽がもし昇らなかったなら、三分後には僕たちは、コネティカット州に衝突するところだった。

小屋は、小さな港の突端にあった。その先には、風雨にさらされたこけら葺きの家や船小屋が並び、船着き場を湾が半円形に気持ちよく囲んでいた。

後ろにはきれいな楡の木が立ち並び、教会の尖塔が見える。波の無い静かな港には沢山の漁船のマストが見える。水面の向こう側、草の生えたところにはすっかり白くなった灯台が紅の朝日に照らされ、赤く染まっていた。

波止場の端のボートの中の牡蠣漁師と彼の小屋からたち昇る煙以外は、その小さな村と港は眠っていた。それは満足、信頼、平和を象徴していた。

レイディ・モーヤは思わず声に出した。

「きれい、何てきれなんでしょう！」

アイヴィー卿は舳先を波止場に向け船を走らせた。他の連中も立ち上がり歓声をあげた。僕たちの姿や声が霧の中から魔法の様に出現したので、漁船の中にいた男は立ち上がり背伸びして人魚でも見つけたかのように、信じがたいという様子で見ていた。

彼は老人だが背筋の伸びた背の高い男である。牡蠣漁師の履くブーツは尻のところまであって、さらに背を高くみせていた。彼は輝くような白髭で、顔は古い銅のように日焼けしている。しかし眼は青く、若々しく柔和だった。そして、急に興奮し、また同情の色をみせた。

「ペイシャンズに乗っていたのかね」と叫んだので、みんな、そうだと声を揃え、アイヴィーはボートを漁船の隣につけた。

老人は後ろを向くと、手を口にメガフォンのように当てて小屋に向かって大声で言った。

「母さん！ 母さんや、難破した人が上陸したよ。コーヒーを沸かして、毛布を用意してくれんか。

それに、ベーコンエッグもね」

「神様の祝福があなたの方ありますように！」レイディ・モーヤの祈りが聞こえた。

しかしオルドリッチは興奮し、しめたとばかりに札束を引っ張り出すと、その老人に向かってひらひらさせ、

「十ドル稼ぐ気はないかね、爺さん。村まで走って行って警官をつれてこいや」と大声を出した。

レイディ・モーヤはひどい男だと非難し、アイヴィー卿は呪い、キニーはみじめに唸ると絶望して頭を抱えてしまった。

「残念ですが、ご期待には沿えませんが、オルドリッチさん」と僕は言った。その時まで、僕はボートの中に腰を下ろしていたので、他の連中の陰になっていた。僕は立ち上がり、その老人も僕を見た。僕は、彼の片手に自分の手を当て、サスペンダーにくっついていているバッジを指して言った。

「彼はこの村の警官ですよ。」と説明すると、僕は可愛い女の子の人を見て、

「レイディ・モーヤ、僕の親父を紹介しましょう。」と言った。

ツタに覆われた小屋を指し、

「あれが僕の家です。」

寝ている町を指して、

「あれが、フェアポート村です。殆ど父が所有しています。村へようこそ。」と言った。

この作品は Richard Harding Davis による「Make Believe Man」の翻訳です。ソースは Project Gutenberg です。